

9月



あの日のあの川 リレー日記 ～第20話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第20話主人公 菊地康佑

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：茨城県久慈川)

「苗箱」

いつのこと？： 小学校時代

どこの川？： 久慈川

僕は泳げない。友人の大半が楽しみにしていた小中学校のプールの授業もあまり好きではなく、憂鬱だった。高校に進学する際に一番重要視していたのは学校にプールがあるかないかだ。プールがない高校に受かるために必死に勉強した。そんな僕も決して「水辺」自体が嫌いなわけじゃない。川も池も海もむしろ好きだ。とりわけ好きなのは用水路。祖父母の家の田んぼのそばを流れる名前もない小さな用水路は僕の小学生時代の思い出がみっちり詰まっている。

毎年5月の連休には母方の祖父母の家に泊まりに行く。自分が住んでいる所からそこまで30分弱、月に一回程度は訪れていたが、新緑のこの季節の訪問は楽しみの度合いが違う。久慈川の水が用水路を通って、渴いていた田んぼに流れ込んでいく。そう、5月は田植えの季節だ。僕は田植えの手伝いに毎年駆り出されていた。

小学生の僕に手伝ったことは多くない。田んぼ端っこに植えさせてもらったり、田植え機の隣に乗せてもらっていたりしていた。これらは正直手伝いとは言えない。むしろ足を引っ張っていた。僕の仕事と言えば、主に、携帯電話を持たずに田んぼに出ていく祖父と家でご飯を作っている祖母の連絡係として自転車を走らせることだった。ただ、もう一つ自信をもって手伝いをしていたと言えることがあった。それは苗箱洗いだ。祖父が苗を植え、空になった苗箱を父が僕のもとに持ってくる。田んぼのすぐそば、二本目の電柱とトタンの小屋の間を流れる用水路ここが僕の「いつも」の洗い場だ。深さは2, 30センチメートル程度あり、他の場所より幾分か深く水も多い。流れはそんなに速くない。絶好の苗箱洗いポイントだ。水路に苗箱を浸し、手元にあるたわしで大きな泥を落とす。次は、二つのブラシが平行してセットされた専用の洗い機に苗箱を押し込み十数回上下させ洗う。この時点でほとんどの場合はキレイになるが、それでも取れない泥はたわしを使う。この手順を繰り返して1日に100枚以上は洗う。

この時期に照り付ける日差しはもう真夏とかと思うくらい暑い。加えて、単純作業の重労働である。大学生となった今、手伝いをしろと言われたら、正直やりたくない。なんなら、アルバイトがあるだのなんだの理由をつけて回避したいくらいだ。しかし、こんな重労働でも小学生の自分には本当に楽しみで、待ち遠しいものだった。暑さの中にある水の冷たさ、涼しさに魅了されていたのかもしれない。家に帰ればクーラーの利いた涼しい部屋が待っている。それも好きだ。しかし、「暑い暑い」と言いながらも自然の水から涼をとる。この感覚は言葉では何とも言い表し難い素晴らしさがあった。単なる涼しさだけではない。大げさかもしれないが、幼いながらに肌で自然を感じているんだという気がした。足だけ水の中に浸かって洗う。苗箱を激しく上下させてわざと水しぶきをあげ、それを浴びながら洗う。様々な工夫を凝らし暑さを逃がそうとしていた。それが純粋に楽しかった

水だけでない、田植えが楽しみだった理由のもうひとつは大人になれた気がしたからだ。「たかが苗箱洗いといえど侮るなかれ、たかが苗箱洗いといえど侮るなかれ、来年もおいしいお米を作るためには重要な仕事なんだ」と祖父は教えてくれた。そして一枚でも多く洗えば洗うほど、よりきれいにすればするほど祖父は喜ぶ。喜んでいる祖父を見ると、なんだか認められた気がしてうれしかった。

今年の五月、就職活動の合間を縫って祖父母の家に帰った。祖父は七年前に亡くなり、祖母はもう高齢で農業はしていない。田んぼはもう自分たちのものではない。それでも、次の人に引き継がれ昔と同じような光景が広がっている。僕は「いつも」の場所に足を浸けてみた。日差しの暑さも、水の冷たさも、匂いも、景色も何も変わっていない。この水に触れるとあごろの思い出を鮮明に思い出す。泳げない僕がいつまでも大好きな「水辺」だ。

(次は日比野愛さんにバトンを託します)